

空



2009年

**SORA** 25号

ぼたん雪(25) — 3

柴田 佐知子

太き根の飾られてゐる遍路宿

陽炎や食みては歪む牛の貌

山笑ふ一つは鬼の棲む山ぞ

見せ合ひて傷誇る子や春の草

撫でられし猫は平たくなりて春

一山の神を称へて囀れり

その隅の種の出てこぬ種袋

昼眠る父よ母よとぼたん雪

日脚伸ぶ 青山 悠

静けさや雪としるせし初日記  
初御空ふるはせて発つ一番機  
恙なきこと伝へあふ初電話  
異国語の御一行様日脚伸ぶ  
掘割の雲割つてゆく炬燵舟  
狐火や墳のいはれは知らぬまま  
日を享けて思ひおもひの福寿草  
春を待つ出雲の瑪瑙うすみどり  
県庁の門に力や辛夷の芽  
観光に廻る水車や山笑ふ

・ばくちでさん・



私に二人の子がいて、上の女の子が幼稚園に入園したころ、キンダーブックを抱えて帰ってくると、何度も読み返していた。それを聞いていた年下の男の子はうる覚えのまま……うらのはたけをからすのはだれだろちいさんでてみたら……と口ずさんでいた。「あらず」を「からす」と覚えたらしい。少しずつ字が読めるようになったその子が「お母さん、ばくちでさんーてどんな人」と聞いてきた。どれどれと絵本を読んでもみると「ばくちでさんざん負けた隣の欲ばりちいさん」というところを「ばくちでさん」で句切つて読んでいたのだ。童話の花咲じいさんの話であった。

幼かった二人も今は還暦近くになっている。遙かな思い出である。

# 荒波

秋 千 晴

猪鍋の湯気垂直に同期会  
ざぼん剥く親指埋もれ香り立つ  
荒波を引き連れて鯨上がりけり  
競り売りの鮪の口に氷詰め  
火の落ちて焼芋を待つ輪となりし  
海鼠噛む口歪ませて真顔なり  
遮断機の長々下りて春寒し  
春涛に打ち砕かれし七ツ釜  
吊釜や会話も揺れてももいろに  
ほうろくのごまの跳ねたるみどりの日

・牛歩遅々・

ヤレヤレ忙しかった鼠年から丑年になった。初釜の掛け軸に「牛歩遅々」とあった。何事も一歩一歩だと肝に銘じたつもりだったのに初釜の手伝いで二日目のこと、社会は仕事始めで車が混んでいて、集合時間より遅れてしまった。慌てて玄関先に入ろうとしたとき転んでしまった。足が上がりなかつたのだ、幸い血も出ていなかったし、もう皆は水屋着で忙しくしていたので私も手早に準備にかかった。一日が終わって風呂に入ったとき初めて膝の青染みに気づき、アー「牛歩遅々」だったのにナーとつくづく反省した。



# 真昼

あさなが捷

霜月や菩薩はみんな立たれをり  
逆賊の墳を封じて石路の花  
消火器のどんと据ゑられ山眠る  
照らされていよよ荒ぶる里神楽  
別れより大きく闇の冷えてきし  
薄闇の音閉ぢ込めて寒牡丹  
葱坊主よく泣かさるる隣の子  
海女の息ためて深まる海のいろ  
負鶏に涙はあらず真昼なり  
下二段てふ難儀なるものつちふれり

・ナイスフオロー・

ガソリン代節約と健康維持の為、去年四月から電車通勤を始めた夫は、地下鉄大濠公園駅と会社の往復と、帰りの今宿駅から家までの計四十五分ぐらいを週五日歩くようになりました。

そして迎えた最初の健康診断の日、体重が減っていると期待していたのに変わっていなかったと、がっかりして帰ってきました。

それぐらいの運動量では足りないのかしらと、なぐさめたつもりの言葉をひどいと思ったのか、息子が「脂肪が筋肉に変わったんじゃない？」と言いました。

私は思わず「ナイスフオロー」と叫んだのですが、今度は娘が「ナイスフオロー」といわれた時点で、もはやそれはフオローではなくなった」と又話をややこしくして、更に夫を落ち込ませることになってしまいました。

言葉とは本当におもしろいものです。

# 年輪

小林 朱夏

表札に年輪のあり初日の出  
浜焚火雨戸長持投げ入れて  
焼芋屋同じ口調で同じ道  
消防車常に磨かれ待機する  
断りもなく覗かるる寒牡丹  
始発待つ枕木濡れて春近し  
雛飾り終へて男は近寄らず  
礼節を跨いでゆきし恋の猫  
鶯の声がひとりに余りけり  
鳥の群かぞへ偶数あたたかし



・憎いあ、ちくしょう・

大相撲は、初場所の盛り上がり続き、優勝力士の報道が暫くあり賑やかだった。  
栃若時代から横綱相撲を観てきた私は、どうしても美しい取り口の白鵬に声援を送りたくなる。しかし、朝青龍のファンは多い。何故なんだろう。  
ところで、町内に、屈託なく楽しい悪さをし、いつも親に叱られ、大人をハラハラさせながらも可愛がられている子がいる。この男の子、よくよく見ると、誰かに似ている様な…。

## 母の部屋 苑 実 耶

真直ぐに育ちし峡の氷柱かな  
御慶の子体全部を声にして  
初御空赤子がまるき手をひらく  
濃く太く謹賀新年のみの文  
夢はじめ恋もデートも思ふまま  
入院の母に届くる年賀状  
鳥の影大きく過ぎし冬の宿  
石段の影のでこぼこ春隣  
厚紙で父が作りし追儼の鬼  
春浅し杖の残りし母の部屋



・中丸君・

最近、テレビを見ていて「父・母」と言わない人が多いのがとても気になる。結構な大人でも「お父さん、お母さん」と言っている。

少し前は「見させていただきます」などの馬鹿丁寧な言い方が気になった。NHKのことばおじさんが「ことばは時代時代で変化していくもの」というようなことを一言っていた。

そう言えば「やばい」は感動した時に使うようになった。芸能人などが全国放送で言うのと、影響が大きいような気がする。

そう思っていると、KAT-TUNの中丸雄一君が「お父さん」と言いかけて「父」と言い直していた。中丸君の顔と名前がやっと一致した。

## 日向ぼこ 高倉恵美子

神迎へおにぎり六百揃へけり  
 辛抱が大事と生きて日向ぼこ  
 今年まで今年までとて冬菜蒔く  
 連山を見飽き干柿吊しをり  
 注連飾る熨斗を吊して終りけり  
 夫の手を借りるばかりの年用意  
 初湯して長く生きしと思ひけり  
 冬ごもり忘れられたる心地する  
 大根漬け夫に教へて入院す  
 路地に入りたる寒行の声細る



転ばぬようにいつも気をつけていたのだが、ふとした拍子にバランスを崩して倒れ背中を思い切り打ってしまった。あまりの痛さにしばらく声も出なかったほどである。診察の結果、圧迫骨折で長期入院となった。初めて味わうような激しい痛みの中で朦朧としながら長生きしすぎたかな、などと考えていた。

まだ痛みは残るが本を読む余裕も出てきた。するとすかさず訪ねて来た娘に俳句はまだかと急かされている。

リハビリに病室の人とお喋りに俳句にと結構忙しく過ごしている。